仙 台 大 学 紀 要
Vol. 51, No.1: 35-43, 2019

介護福祉をテーマにした中高生向け出前授業からの一考察
―宮城県A中学校とB高校を対象とした事後アンケート調査より―

後藤　満枝[1)]　　篠原　真弓[1)]　　堀江　竜弥[1)]
福田　伸雄[1)]　　大山　さく子[1)]

1）仙台大学体育学部

仙台大学紀要
Vol. 51, No.1: 35-43, 2019

学会等報告

介護福祉をテーマにした中高生向け出前授業からの一考察
―宮城県A中学校とB高校を対象とした事後アンケート調査より―

後藤　満枝[1)]　篠原　真弓[1)]　堀江　竜弥[1)]　福田　伸雄[1)]　大山　さく子[1)]

1）仙台大学体育学部

Mitsue Goto[1)], Mayumi Shinohara[1)], Tatsuya Horie[1)], Nobuo Fukuda[1)], Sakuko Ooyama[1)] : A Study on Change of the Attitude of Junior and Senior High School Students toward Nursing Care after a Workshop -Based on the Follow-Up Questionnaire to Students in A Junior High School and B Senior High School in Miyagi-: Bulletin of Sendai University, 51 (1) : 35-43, September, 2019.

1) Sendai University Faculty of Sports Science

KEYWORD attractiveness of nursing care, improvement in the image, simulated experience of the elderly, nursing care trial
キーワード 介護の魅力,イメージアップ,高齢者体験,介護体験

Ⅰ．はじめに

介護人材不足が社会問題となる中，介護福祉士養成施設数や介護学生数も年々減少傾向にあり，公益財団法人介護福祉士養成施設協会（2018）によれば,平成30年度の定員充足率は全国で44.2％となっている．本学の介護福祉士養成についても同様で，ここ数年定員充足率が低い現状にある．

藤野・市川（1990）；益川ら（2017）；津田（2010）の研究では,「介護」について,「きつい」「汚い」などというネガティブなイメージが根深いことが指摘されている．そもそも中学生や高校生などの若い世代にとって，介護はこれまでの生活体験にはないために，想像することも正しく理解することも困難な領域であろう．したがって，これから介護を担う世代である中学生や高校生に対して，正しく介護や介護の魅力などについて理解してもらうような広報活動が重要であると考える．

そこで，介護や介護の魅力を中学生および高校生に伝えること，本学の介護福祉士養成専攻への入学促進などを目的とし，平成30年度に宮城県介護従事者確保対策事業を展開した．堀江ら（2017）の調査報告にもあるように,これまでにも本学では，同事業の中で高校訪問や介護の魅力をPRするような広報媒体の作成，広報活動などを展開してきた．今回実施した事業内容の一つは，中学生・高校生向けに介護福祉領域のオーダーメイド型の出前授業を実施し，介護の仕事や介護の魅力，進路について説明するというものであった．また，大学主催のイベントの際に介護の魅力を伝えるブースを設け，中学生・高校生，教員などに対してPR，広報資料の配布などを通して介護の魅力を伝える普及啓発活動を実施した．さらに，広報の基礎資料にするために，介護に関する進学・就職，イメージに関する調査を実施した．

それらの事業内容の中で，1つ目に挙げた，中学生・高校生向けのオーダーメイド型の出前授業については，出前授業内容の例を「認知症支援」「介護の魅力」「老化に関する講義」「ボディ

メカニクス」「救急蘇生法」などというキーワードと共に内容の説明文を加えるかたちで一例を示し募集案内したが，学校側からの要望としてあったのは大別して2種類であった．1つは，介護の仕事内容や魅力について，できれば身体を動かせる内容を含めてほしいといったもの，もう1つは，心肺蘇生についてである．

今回は，その中でも介護の仕事内容や魅力について紹介した授業について実施状況を報告すると共に，授業の理解度や感想など，今後の出前授業を展開する上での基礎資料とするために実施した事後アンケート調査結果について報告する．

Ⅱ．方法

1．授業の実施について

1）対象

宮城県内の中学校210校と高校102校へ，介護福祉領域における出前授業の案内資料を郵送し，申し込みのあった学校のうち，介護の仕事内容や魅力についての授業を希望したＡ中学校とＢ高校が今回の対象である．生徒数は，Ａ中学校の1年生105名，Ｂ高校の1年生112名である．

2）授業の方法

申し込みのあったＡ中学校とＢ高校の担当教員と，何度かFAXや電話にて日程や教室，生徒の状況，授業内容，授業時間等の調整を図った上で，当日の出前授業を実施した．授業は本学教員2名で行った．また，各授業において，補助学生として4～5名の本学学生も同行した．

3）授業の概要

Ａ中学校では，総合学習の時間に「いろいろな職業を知る」というテーマの下，介護の魅力などについて講義と演習を行ってほしいという要望であった．また，Ｂ高校においても総合の時間を利用し，介護の魅力や老化のメカニズム，ボディメカニクスなどの講義と演習を行ってほしいという要望であった．ある程度，内容は一任された．これらの要望を受け，介護の仕事，介護の魅力などについて，動画も活用しながら講義を行った．また，年をとるとはどういうことか（高齢者体験），立ち上がりの介助（介護体験）などについて演習を展開した．

4）授業実施時期と実施教室

Ａ中学校は，平成30年11月7日（90分授業，途中10分程度の休憩を含む），Ｂ高校は，平成30年11月14日（50分授業）に実施した．なお，教室は，Ａ中学校は多目的ホール，Ｂ高校は視聴覚室を使用して実施した．

2．本学が実施した事後アンケート調査について

1）目的

出前授業の振り返りから,今後の出前授業や学生募集を行う際の参考とするために実施する．

2）調査対象

Ａ中学校とＢ高校の出前授業に出席していた生徒を対象とした．

3）調査方法

調査は無記名自記式の質問紙調査とし，授業実施後に配布し回収した．

4）調査内容

調査内容は，中学生・高校生の別，学年，性別，授業内容の理解度，高齢者体験と介護体験の感想，介護・福祉への興味・関心度，介護・福祉関係の仕事への就職希望の有無，意見・要望等であった．

5）倫理的配慮

事後アンケート調査の実施については，あらかじめ各校の担当教員に調査の趣旨と目的，アンケート内容等について説明し,了承を得た上で行った．生徒本人に対しても同様に説明し，回答は答えられる範囲の記入で構わないことを説明し，了承を得て実施した．

Ⅲ．結果

1．授業の実施状況

1）介護の仕事，介護の魅力についての講義

福祉や介護とはどういうものなのか，介護

福祉士をはじめとする介護福祉関係の専門職，介護の仕事，役割，活躍の場，介護の魅力などについて，イラストを加えたスライドを用いながら，中学生や高校生向けに解説した．特に介護福祉関係の専門職や介護の仕事内容などについては，宮城県介護人材確保協議会制作の『ケアヒーローズ』の動画も一部放映し,紹介した．動画を放映する前に，介護のイメージや高齢者のイメージがどのようなものかを生徒に投げ掛けると，A中学校の生徒はあまり反応がなかったが，B高校の生徒からは活発な返答が会場から聞かれた．

動画および講義の中では，介護福祉領域の専門職は介護福祉士だけでなく様々な専門職が協働している様子や，介護が単なるお世話ではないこと，介護福祉士の働く職場や活躍の場も多種多様であること，介護現場で働く人の仕事のやりがいについての声などを紹介した．

2）高齢者体験

加齢により心身には様々な変化が表れるが，今回は，身体バランスの低下体験，身体的パワーの低下体験，椅子からの立ち上がり体験の3つの高齢者体験を取り入れ，加齢による心身の変化についての理解を促した．

（1）身体バランスの低下体験

加齢に伴う身体バランスの低下体験として，はじめに「開眼片足立ち」を行い，1分間開眼した状態で片足で立ち続けることができるかを行った．続いて「閉眼片足立ち」を行い，1分間閉眼した状態で片足で立ち続けることができるかを体験した．開眼ではほぼ全員がふらつくことなく立ち続けることができたが，閉眼では1分以内にふらつき足をついてしまう生徒も多かった．途中経過時間や残り時間をカウントして伝えることで，生徒たちは必死にふらつきをこらえ，終了後は笑顔が多く見られた．

この体験では，加齢による下肢筋力の低下や身体バランスの低下に加え，我々がいかに普段視覚からの情報を受け取っていて，その視覚からの情報がいかに大切か，また加齢や疾病・障害によりその視覚に何らかの支障が生じた場合には，より身体のバランスを失いやすく，歩行にも影響してしまうことなどを解説した．

（2）身体的パワーの低下体験

加齢による身体的パワーの低下体験として，「床からの立ち上がり」を行った．はじめに，床に座り，全員で一斉にそこから立ち上がった．床に手をついて立ち上がる生徒，何の支えもなしに即座に立ち上がる生徒などがいたことを指摘した．次に，2人1組になり，1人が床に座っているもう1人の両肩に手を置くか，おんぶされるようにして体重をかけ，その状態から床に座っている人が立ち上がれるかどうかを体験した．実施に際しては，立ち上がる側の人は決して無理をしないように伝えたが，特に親しい間柄では互いに遠慮なく，盛り上がりの声が聞かれた．

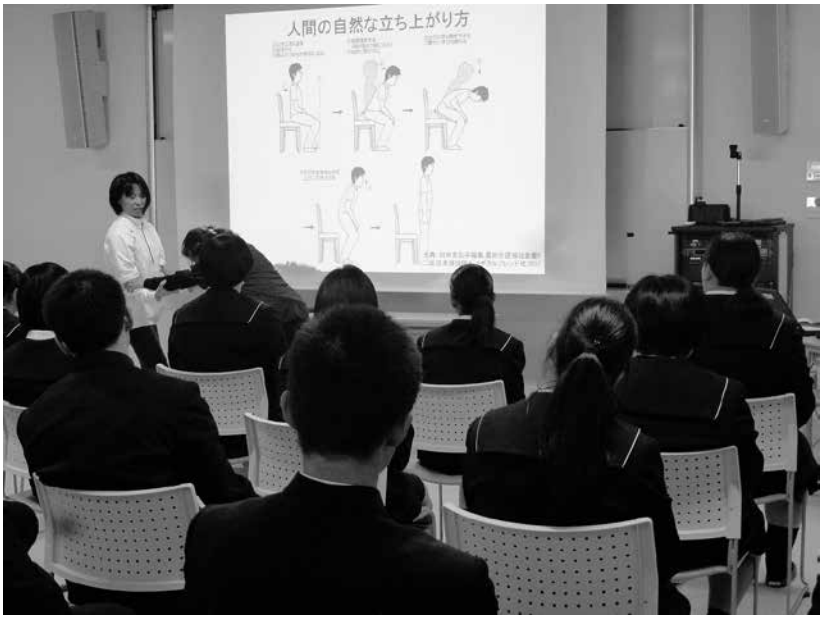
この体験では，加齢に伴い全体的に身体のパワーが低下し，人を背中に乗せているほどの重みを感じ，床からのスムーズな立ち上がりが困難になることを解説した．

（3）椅子からの立ち上がり体験

加齢により関節が硬くなる体験として，椅子からの立ち上がりを行った．はじめに，生徒それぞれが椅子に座り，全員で一斉に立ち上がり，特に問題なく全員が立ち上がれることを確認した．次に，足を前に放り出すようにして座った姿勢から立ち上がることができるかを体験したが，これはなかなか立ち上がることのできた生徒はいなかった．続いて，2人1組になり，1人が椅子に座っているもう1人の額に人差し指を当てる．そこから座っている人は立ち上れるかどうかの体験を行った．これもなかなか立ち上がれる生徒はおらず，生徒たちは，なぜなのかと興味津々であった．

これらの体験は，介護福祉士養成における授業の中の「ボディメカニクス」の授業でもよく行われる演習である．人間が自然に立ち上がろうとするときには，重心移動の関係で，

足を引き，お辞儀をするように前傾姿勢になる．お尻が浮いてきてはじめて立ち上がることができる．しかし，加齢に伴い，関節が硬くなってくると，一つひとつの動作が遅くなる．例えば，若い人が無意識に行っているこの立ち上がりの姿勢も，加齢で膝関節が硬くなってくると，自分の足を引くこと自体が難しい．また，自分の額を相手に1本の人差し指で押さえられるだけで，前傾姿勢がとれなくなる．結果，重心移動がスムーズにいかず，立ち上がることが困難になる．こういったことを生徒同士の体験の後に,川井（2014）による参考資料を用いて解説すると,生徒たちは真剣に聞き入っていた（資料１）.



資料１　人間の自然な立ち上がり方ついての講義の様子（B 高校の授業より）

３）介護体験

介護体験というと，ベッドや車椅子などの福祉用具を活用してできる内容のことを連想しがちであるが，今回は与えられた環境の中で容易にできることを紹介した.

（１）椅子に座っている人を楽に立ち上がらせる体験

椅子からの立ち上がり体験を受け，椅子に座っている人を楽に立ち上がらせる方法について改めて解説し，体験した．上述したように，人間は足を引き，前傾姿勢をとりながら立ち上がろうとするのであって，真上に立ち上ろうとしても立てない．よって，介護者は相手の足を引き，前傾姿勢をとらせ，人間の自然な立ち上がりを意識しながらその動きに沿うようにサポートをするだけで，その方の力を引き出し，楽に立ち上がらせることができる．こういったことを，実演しながら伝えた.

４）介護福祉の魅力を伝えるための動画視聴

平成28年度宮城県介護従事者確保対策事業の中で本学が作成した，介護福祉の魅力を伝えるためのDVDを視聴した.

５）授業のまとめ

最後に授業のまとめを行った．介護は特別なことではない．加齢に伴い身体が思うように動かず動作が遅くなったとしても，介護者は相手の身になり，急かさず相手のペースに合わせた声がけとさりげないサポートが必要であること付け加えた.

２．事後アンケート調査の結果

１）A中学校の結果

（１）対象者の基本属性

A中学校では1年生100名から回答が得られ，その内訳は，男性46名（46％），女性50

名（50%），無回答4名（4%）であった（図1）.

（2）授業内容の理解度，感想

当日の授業に関して，介護の仕事について理解できたかとの問いには，「理解できた」が62名（62%），「少し理解できた」が37名（37%），「あまり理解できなかった」が1名（1%），「理解できなかった」が0名（0%）であった（図2）.

加齢に伴うからだの変化について理解できたかとの問いには，「理解できた」が74名（74%），「少し理解できた」が22名（22%），「あまり理解できなかった」が4名（4%），「理解できなかった」が0名（0%）であった（図3）.

高齢者体験・介護体験が楽しかったかとの問いには，「楽しかった」が72名（72%），「まあ楽しかった」が24名（24%），「あまり楽しくなかった」が4名（4%），「楽しくなかった」が0名（0%）であった（図4）.

（3）介護・福祉への興味・関心など

介護・福祉への興味・関心が持てたかとの問いには，「持てた」が33名（33%），「少し持てた」が61名（61%），「あまり持てなかった」が6名（6%），「持てなかった」が0名（0%）であった（図5）.

また，授業を受けて，将来，介護・福祉関係の仕事に就きたいと思ったかとの問いには，「就きたい」が3名（3%），「就くことを少し考えた」が48名（48%），「就きたいと思わない」が14名（14%），「わからない」が35名（35%）であった（図6）.

（4）授業の感想，意見・要望等（自由記述）

授業を受けての感想等は，ほとんどが前向きな内容であった.「介護の仕事がよくわかった」や「介護や福祉の中でもいろいろな職があって驚いた」などという講義に関する回答が挙げられていた．また，「高齢になると身体がきつくなるのがわかった」「お年寄りの気持ちになれた」「体を動かすことは楽しかった」「おじいちゃんやおばあちゃんのことを自分の手で介護したいと思った」などと高齢者体験や介護体験についての回答も挙げられていた．さらに，「介護の見方，イメージが変わった」「介護は大変としか思っていなかったけれど，とてもやりがいがあり，楽しい仕事なのだと思った」「介護の仕事に興味を持つことができた」「介護を一生懸命にやっている人をかっこいいと思った」などと，介護・福祉へ良い印象を持ち，興味・関心を寄せている回答も多く挙げられていた.

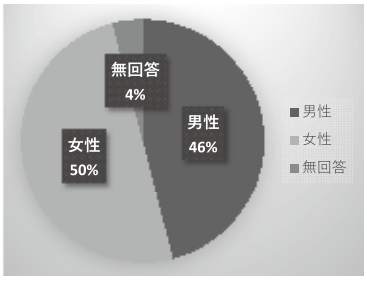


図1　性別（A中学校）

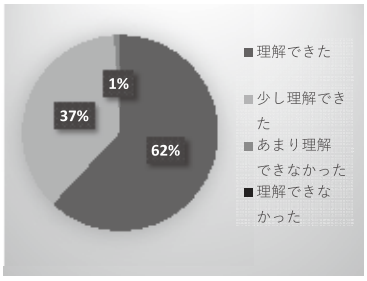


図2　介護の仕事の理解（A中学校）

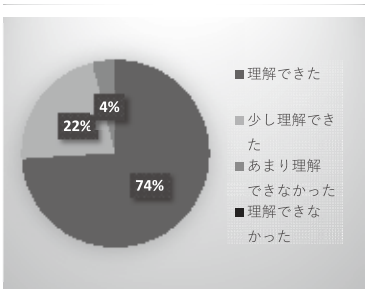


図3　加齢に伴うからだの変化の理解（A中学校）

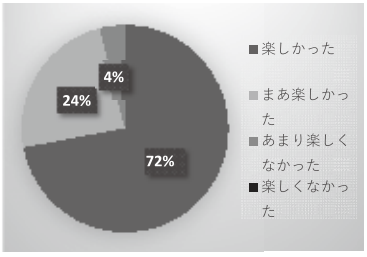


図4　高齢者体験・介護体験が楽しかったか（A中学校）

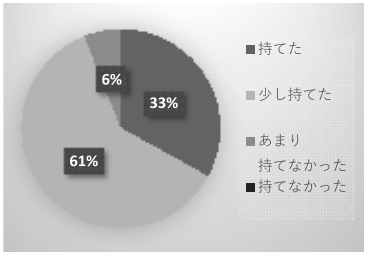


図5　介護・福祉への興味・関心（A中学校）

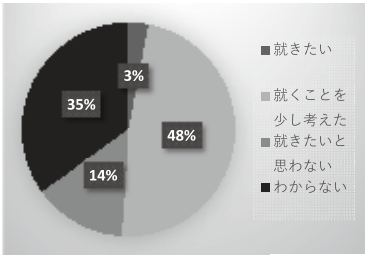


図6　介護・福祉関係の仕事に就きたいか（A中学校）

２）Ｂ高校の結果

（１）対象者の基本属性

Ｂ高校では1年生106名から回答が得られ，その内訳は，男性86名（81％），女性17名（16％），無回答3名（3％）であった（図7）.

（２）授業内容の理解度，感想

当日の授業に関して，介護の仕事について理解できたかとの問いには,「理解できた」が61名（57％),「少し理解できた」が41名（39％),「あまり理解できなかった」が2名（2％),「理解できなかった」が2名（2％）であった（図8）.

加齢に伴うからだの変化について理解できたかとの問いには,「理解できた」が72名（68％),「少し理解できた」が30名（28％),「あまり理解できなかった」が1名（1％),「理解できなかった」が2名（2％), 無回答が1名（1％）であった（図9）.

高齢者体験・介護体験が楽しかったかとの問いには,「楽しかった」が53名（50％),「まあ楽しかった」が44名（41％),「あまり楽しくなかった」が4名（4％),「楽しくなかった」が5名（5％）であった（図10）.

（３）介護・福祉への興味・関心など

介護・福祉への興味・関心が持てたかとの問いには,「持てた」が41名（39％),「少し持てた」が45名（42％),「あまり持てなかった」が13名（12％),「持てなかった」が7名（7％）であった（図11）.

また，授業を受けて，将来，介護・福祉関係の仕事に就きたいと思ったかとの問いには,「就きたい」が8名（8％),「就くことを少し考えた」が32名（30％),「就きたいと思わない」が38名（36％),「わからない」が28名（26％）であった（図12）.

（４）授業の感想，意見・要望等（自由記述）

「介護の仕事がどういう仕事か知ることができてよかった」「介護の仕事に対するやりがいがどういったことなのかを知ることができた」などという，講義に関する回答が挙げられていた. また,「老人の苦労がわかった」「高齢者は身体が変化してしまってつらいのだと思った」「身体の使い方によって女性でも高齢者を起こしたりできるということを聞いて，すごいと思った」「介護体験が楽しかった」などという，高齢者体験・介護体験についての回答も挙げられていた. さらに,「この授業を受けて自分も人の役に立ってみたいと思った」「介護・福祉の仕事は，とても大変だというイメージしかなかったけれど，おじいさんやおばあさんと話したり楽しさを感じながら，仕事ができることがわかった」「話を聞いて興味が持てた」「介護の仕事も楽しそうだと思った」などと，介護・福祉への印象の変化を感じさせる回答が挙げられていた.

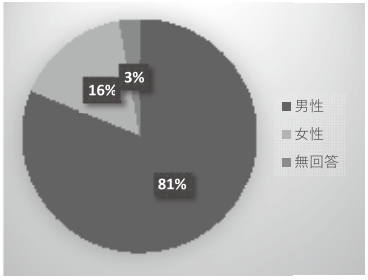


図７　性別（Ｂ高校）

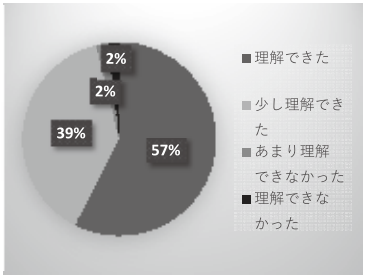


図８　介護の仕事の理解（Ｂ高校）

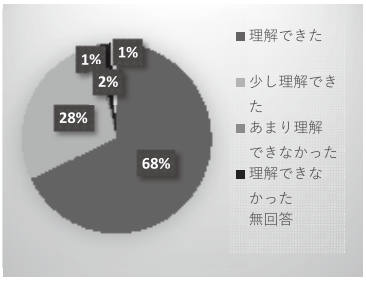


図９　加齢に伴うからだの変化の理解（Ｂ高校）

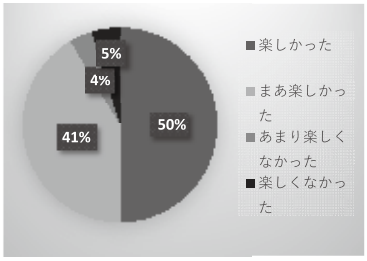


図 10　高齢者体験・介護体験が楽しかったか（Ｂ高校）

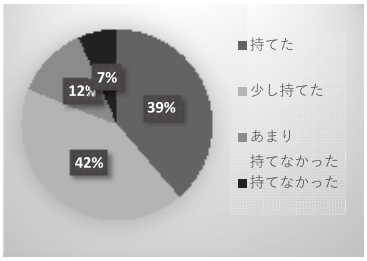


図 11　介護・福祉への興味・関心（Ｂ高校）

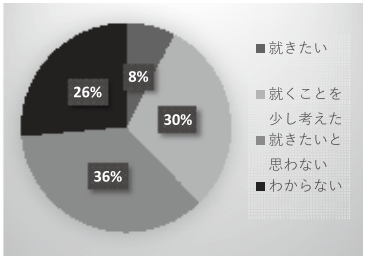


図 12　介護・福祉関係の仕事に就きたいか（Ｂ高校）

Ⅳ．考察

今回の対象について，Ａ中学校の生徒は男女比が約1対1，Ｂ高校は約8割が男子，普通科を設置していない専門技術を学ぶ高校であった．

授業では，福祉や介護についての講義や，介護の仕事などについて解説したが，事後アンケート調査では，介護の仕事について，「理解できた」「少し理解できた」を合わせ，Ａ中学校，Ｂ高校共に100％に近い割合で理解できたと回答していた．また，加齢に伴うからだの変化についても，「理解できた」「少し理解できた」を合わせ，両校共に96％と，100％に近い割合で理解できたと回答しており，講義や演習を通して，ある程度の理解は得られたと推察される．

一方で，高齢者体験・介護体験についての感想として，「楽しかった」「まあ楽しかった」を合わせると，Ａ中学校もＢ高校も9割以上の人が楽しかったと回答していたが，さらに内訳をみると，「楽しかった」の割合がＡ中学校で7割強，Ｂ高校では5割と，学校間で差が見られた．体験自体が易しい内容であったため，高校生にはやや物足りなかったとも考えられる．また，Ｂ高校の授業時間が50分間と，Ａ中学校よりも短かったために体験時間もやや縮小して実施したことも要因として考えられる．それでも，「介護体験が楽しかった」の回答が多く見られたことや，加齢に伴うからだの変化について，事後アンケート調査やＢ高校の振り返りシートからも，生徒の理解を得ることができたことが推察され，実際に身体を動かすような体験を通して理解を促進する授業は，有効であると考えられる．

今回の授業を通して，介護・福祉への興味・関心が持てたと回答した生徒は，「持てた」「少し持てた」を合わせると，Ａ中学校で約9割5分，Ｂ高校では8割強と，興味・関心を引くことができた．また，事後アンケート調査の結果からも，授業前までにはネガティブな介護イメージを持つ生徒も,授業後には，介護がポジティブなイメージに変化している傾向も示され，今回の出前授業による効果は少なからず得られたものと考えられる．

授業を受けて，将来介護・福祉関係の仕事に「就きたい」「就くことを少し考えた」と回答した生徒は，合わせてＡ中学校で約半数，Ｂ高校では4割弱であった．中学1年という学年では就職はまだ先のことであり，「就きたいと思わない」というよりも，「わからない」が目立って当然の結果と考えられる．Ｂ高校は普通科を設置していない専門技術を学ぶ高校であるため，高校に入学する段階で，ある程度就職先の業種は絞られている生徒も少なくないと推測される．そのような中で，中学1年・高校1年の段階で介護・福祉関係の就職を少しでも考えた人がこれだけいたということは，介護・福祉に対する前向きな感想からしても，授業効果として高いと考えられる．

なお，今回，Ｂ高校では，授業後に学校側で振り返りシートを用いて出前授業で学んだことの振り返りを行ったと報告を得ている．その結果によれば，高校生46名が，家族に同居している高齢者がいると回答している．また，介護において必要なこととして，「相手のことを考えながら，コミュニケーションを取って接すること」，「高齢者のニーズに応えること」，「思いやり・優しさ・気遣い」，「知識」，「人と接する力と判断力」など，多くの回答が挙げられていた．お年寄りに対する接し方としては，「その人の心に寄り添う形で」，「優しくゆっくりと接する」「笑顔で接する」「明るく接する」「同じ目線になって接する」などという回答が挙げられていた．「今までは家族のことをあまり考えていなかったけれど，改めて深く考えさせられた」という感想もあり，今回の講義や体験を通じて，介護は身近な問題であるということにも気づくことができたものと推察される．

さらに，Ｂ高校では，卒業後の進路で，介護職や介護を学ぶ学校への進学を考えてみたいと思ったと回答した生徒が9名おり，そのうち，「介護の仕事に就いてみたいと思った」人は7名，「介護について学ぶ学校に進学したいと思った」人は3名，「リハビリなどの理学療法士になるための学校に進学したいと思った」人は1名であった（複数回答）．

出前授業の感想として，「最初はあまり興味

がなかったけれど，話を聞いて楽しそうだと思った」,「今まで介護のイメージはあまりよくなかったが，今日の授業でイメージが少し変わった」,「実際に高齢者が感じている感覚を体験するなど，見聞きしただけではわからないことを学ぶことができてよかった」,「今日の話を聞いて，さらに介護について分かったし，就いてみたいと思った」など，多くの回答が挙げられていた.

介護は一般に「大変な仕事」と受け止められがちであるが，今回の出前授業の実施後には，「大変な仕事」だけでなく,「やりがいがあり，楽しい仕事」でもあるというポジティブな見方に変化している生徒も少なくなかった．このことは，平成25年度に「宮城県福祉・介護人材確保対策事業」の中で実施した高校出前授業の結果についてまとめた庄子（2015）の報告の中でもでも同様に示されている.

介護は多くの人にとって必要に迫られなければ体験することのない領域であり，若い世代の人にとってはなおさらである．実際に見聞し，体験を通して介護にふれる機会を持つことが，介護に対する理解への第一歩であり,「知ること」により興味・関心やイメージアップにつながる可能性は高い.

本学では，介護福祉の魅力を伝えるための高校への出前授業はこれまでにも行ってきた実績があるが，中学校への出前授業は今回が初めての試みであった．授業を行うにあたり，特に中学生に対しては，よりわかりやすい言葉を使用するよう心がけた．また，両校とも生徒が退屈することなく，楽しいと思える授業を心がけた．実際に「介護」は一言で説明できるようなものではなく，また専門的知識や技術も必要とされる．1回の授業の中で十分に介護の仕事や魅力を伝えることは難しい．しかし，今回のような体験による楽しかった印象は，後の学習体験や生活体験に出会い結びつけることができたときに，より興味・関心が湧き，専門的に学ぶ意欲につながっていくのではないか.

今回の対象であるＡ中学校とＢ高校の結果を単純に比較することはできないが，学年が上がるほど，生徒は介護のみならず介護以外の分野の職業に関する知識もより多く得ることになるであろう．それに伴い,自分の進路，就職に対する意識や考え方も固まっていくのではないかと考えられる．よって，介護福祉士養成を行う本学としては，これまでのように直接志願者獲得につながる高校への広報活動はもとより，高校入学以前の学年を対象とした広報活動が必要ではないか．具体的には，今後は小・中学生などのより低学年向けの出前授業などにも取り組み，将来を長く見据えた介護福祉の普及・啓発活動を展開していくことが求められると考える.

Ⅴ．まとめ

今回，Ａ中学校とＢ高校の生徒向けに介護福祉領域のオーダーメイド型の出前授業を実施し，その実施状況と事後アンケート調査の結果を示した.

授業では，福祉や介護についての講義や，介護の仕事などについて解説したが，事後アンケート調査から，介護の仕事について，Ａ中学校，Ｂ高校共にほぼ全員が概ね理解できたことが示された．また，加齢に伴うからだの変化についても，高齢者体験や介護体験の効果もあり，ほぼ全員が概ね理解できたことが示された．高齢者体験や介護体験については，多くの生徒が「楽しかった」と感じており，このような体験型の授業は，介護・福祉に関する理解の促進やポジティブな介護イメージの向上につながり，実施する意義が大きいと考えられる.

ただし，中学生と高校生では，学習進度や理解度が異なるほか，ものの感じ方も異なるために，同じ内容であっても伝え方や時間配分，介入の仕方に今後工夫の余地があると考えられた．また，授業においては，中学生や高校生とより年齢の近い補助学生をより前面に出し，生徒と学生がふれあう時間を持たせることも有効であると思われる．そのためには，補助学生への事前指導を強化し，補助学生が主体的に介入できる環境の設定が必要となる.

介護人材を確保するためには，小・中学生などより低学年からの介護福祉教育，介護福祉の普及啓発活動を行っていくことが今後求められ

るであろう．

今回の事業は，宮城県の介護従事者確保対策事業の一環で実施したものであるが，今後も新年度に入り要綱が提示されてからの開始となるため，各学校に募集案内できる時期が年度半ば頃になる．各学校では前年度のうちに事業計画を立てるために，本学としては実際に依頼を受けるケースが少ないのが実情である．いかに介護の普及・啓発活動の機会を増やしていくかは今後の課題である．

謝辞

本報告をまとめるにあたり，出前授業を熱心に受講し事後アンケート調査にご協力いただきましたＡ中学校とＢ高校の生徒の皆様，ありがとうございました．また,準備の段階からご協力いただきましたＡ中学校とＢ高校の関係の先生方に，心より感謝申し上げます．

文献

藤野信行・市川隆一郎：介護福祉士をめざす学生に対する意識調査報告（第３報）―進学動機と介護イメージ―．聖徳大学研究紀要，短期大学部（Ｉ）23：159-168, 1990.

堀江竜弥・後藤満枝・大山さく子・福田伸雄：仙台大学における志願者確保のための一考察

宮城県内の高校を対象とした介護福祉領域に関するアンケート調査から．仙台大学紀要，49（1）：53-59, 2017.

川井太加子編：最新介護福祉全書第５巻　生活支援技術Ｉ（第２版）．メヂカルフレンド社，2014.

公益財団法人日本介護福祉士養成施設協会「介養協News」30　No.2（通巻 27）, 2018.10.

http://kaiyokyo.net/member/20181012_news_no.27.pdf

益川順子，ほか：介護の職業イメージに関する社会学的考察と介護福祉教育の役割．文教学院人間学部研究紀要，18：143-152, 2017.

庄子幸恵：高校生への啓発活動からみる福祉・介護の魅力についての一考察―福祉人材確保の可能性を探る―．東北文化学園大学看護学科紀要，41（1），35-42, 2015.

津田理恵子：学生の介護職イメージ―介護福祉実習体験の違いによる意識の比較―．「厚生の指標」57（8）：27-32, 2010. 8.

（2019年　５月31日受付
2019年　７月19日受理）